

研究成果普及計画書

研究機関名称：首都大学東京（助成年度は東京都立短期大学）

代表研究者氏名：高桑史子

研究課題 スリランカの食文化・調理文化における香辛料使用の変遷 —社会変化とジェンダーの視点から—

助成年度 平成 12 年

1 研究課題・内容の主旨

本研究の目的は、経済発展政策により著しい社会変化の渦中にあるスリランカにおいて、雇用状況の変化と各種電化製品・冷蔵庫の普及、台所の西洋化、食品流通網の変化とともに進む情報のグローバル化が、女性の関与する調理の場面や食生活に与える影響について考察することである。従来、スパイスやハーブ類を多用した調理文化によって特徴づけられる南アジアでは、食材にあわせてスパイスやハーブを使用し、さらに調理の場面では原料をすりつぶしたり、ひいたりする作業から全て各家庭の調理場で行われていた。しかし、女性の雇用機会が増えるにつれ、市販の粉末スパイスが多用されるようになり、また、外食の機会が増え、半調理品が普及するにつれて伝統的な栄養観や食の場面も大きく変化しつつある。

これらのことを踏まえた上で、実際に都市の家族と農漁村の家族との食生活の実態調査を実施した。

2 研究成果のアピールポイント

カレーに代表される南アジアの食文化についての取り上げ方は、一方でスパイスとハーブをふんだんに使用して調理された洗練された理想型としての食文化であり、他方で貧困により基本的な栄養摂取からも疎外された人々の食の実態であった。社会的格差が食にも深刻な影響を与えていることは事実であるが、本研究では、生活に様々な変化がおこっている南アジアにおいて、調理の場面や伝統的な食に関する価値感・栄養観の変化にまでふみこんだ研究を行った。具体的には、日常の食生活ではアーユルヴェーダ(伝統的な栄養観)に配慮する機会がなくなったばかりか、知らない世代も出現していたり、より容易な方法での調理として粉末スパイスの多用に加えて、近年ではケチャップ、マヨネーズ、味の素などの使用も増えている。

さらに冷蔵庫の普及や半調理品が手軽に手にはいるようになった現状で、保存食が姿を消しつつあることも指摘できる。

以上から本研究は、調理の準備や個々の食材への関心を含め、女性のライフスタイルの変化も考慮に入れ、より具体的な日常の家庭生活と関連させた民族誌的研究成果をあげた。

3 研究成果に対する進捗ならびにその発展性

近年、アジア諸地域の観光では、「癒し」をキーワードに「伝統医療」体験ツアーが流行している。インドやスリランカにおいてもアーユルヴェーダを取り入れた観光が盛んになっており、スリランカでは、観光パンフレットや旅行案内書では、従来の仏教遺跡や海岸リゾート地よりも、アーユルヴェーダにより多くの紙面がさかれている。さらに、従来は存在しなかったはずのマッサージなども取り入れた薬草治療など、観光開発と結びついて飛躍的にアーユルヴェーダは脚光をあびているといえよう。

また、生活習慣病を防ぐ効果のあるハーブ類が着目されると、これらの価格が引き上げられ、海外への流出を防ぐための対抗措置がとられはじめている。

海外からのアーユルヴェーダへの熱いまなごしが注がれている一方で、一般の家庭では、上記のケチャップ、マヨネーズ、さらに醤油などの新たな調味料が入り、外食の機会も増え、レトルト食品やカップラーメンなどの消費量も増えている。

本研究成果から、理想型としてのアーユルヴェーダに基づく食生活と実際の食生活の乖離の実態から食の変化に関する比較研究へと発展する可能性が指摘できる。

4 研究成果に対する活用と今後の展望

スリランカでは、近年、糖尿病や高脂血症などの生活習慣病の危機が指摘されている。その過程で、再度アーユルヴェーダの効果が見直されはじめており、大学に新たな学部が設置されるなど、伝統医療を体系的に学ぶ機関も増えている。これは、従来の伝統医療を西洋的な研究枠組みでとらえ直そうとするものであり、伝統医の育成が西洋的な教育で実施されている。このことは、これまで気軽にかかっていた伝統医が村から消えてしまうことであり、また訓練を受けた伝統医も、より高収入が見込まれる外国人観光客用の施設や都会の病院での勤務を望み、「無医村」の出現を予想させる。また、アーユルヴェーダを取り入れた食生活の見直しも、女性の雇用の増加、家族構成の変化による伝統的知識の喪失、食材の高騰などもあり、進展がみられるとはいえない。

今後、スリランカにおいて「伝統回帰」と食生活の見直しが実際の食の場面にどのように反映されるかについて研究を深化させていく。

5 代表研究者として研究に関連する自己アピール

スリランカは2004年12月のスマトラ沖地震津波による災害からの復興が進んでいるとはいいがたいが、アーユルヴェーダをキーワードにした観光の立て直しが行われている。従来のアーユルヴェーダや食文化が外国人観光客のまなごしにどのように適応させながら変化をとげるか、また伝統食の見直しが新たな調味料や食生活の変化とどのような相互関係をもちながら、日常の食の場面に影響を与えていくか、食を中心にスリランカ社会の動態的把握に関する研究をさらに続けていく。